

は。生死のおそろしさに、いかまとおぼえて、ながるゝに侍るといひけり。實に夜るひるに生死の
 難。おこたる事侍らねば。人とも實の徳者者にこそとて。たうとみてかたのごとく命を支ふるわざ
 をば。里の人ともとぶらひ聞えける。ある時このあまいふやう。ちと人にもしられで。去がたき人
 の来りて座の有さまを見んと申せば。入りきこえんと願ひて侍り。今五日はゆめくも、さし
 な入り船ひそといひければ。さればこそ女は。心うき願ひにて有りけるぞ。徳者者と願ひたれば夫や
 らん人にもしられで。入るべき人のありといふ事よとて。あぢふあへりけれど。やくそくのまゝに
 五日は行もせず。四日までは金銀聞えけれど。五日のあかつきより。金銀の難とだへければ人よあ
 やしく願ひて行きて見るに。門にむかひて手を合せて叩き入りにけり。目比のほいのごとく。まこ
 との往生とげにけり。かやうの人は徳者の事心にかける事は。さらに侍らぬに。願ひとりけん心。
 いとぞ有りがたくぞ侍りし。徳者の願ひは。さらに徳者はんべらず。たゞわれをたのまん
 人を。すくはんとちかひ願へり。されば願とてかたの尼の。徳生をとげざるべき。生死をおそれて
 なみだまながし。徳者を信じて徳者おこたり侍らざりけん事。げにくゆ、しきころとぞおぼえ
 はんべりし。是を聞くに。徳も徳者の有徳の徳されてすまらにあせあへてぞ侍る。されば徳
 を。かたふどとしてか。願士へもひかるべき。徳をもつてか。徳者のほほをけし。徳によりてか。

紅葉の水をとかすべき。徳とするわざもなくして願ひとおもふは。じかしなから生死の難に侍れば
 願おもくきざして。むかしの五戒の徳を。ゆくすえなくなしはてんかなしさと。花の上の徳よ
 りも。はかなき命をさへ。水の上の徳よりも。あやうき身をたすけんとして。徳者の徳の音
 をうえん事の。はかなきよ。されば徳者三徳天のそのかみ。徳者のなんにあひ願へるとき。かれ
 らを見て。あに徳者の身のために。徳者の徳の音をうえんやとのたまひし時。徳者さ
 りをひらき侍りて。かしらおろして供養し侍る。是實にいみじき徳にはんべる。人木石にあらざ
 れば。好めば徳心するに侍り。いかにもかなはざらんまでも。徳心このみ徳は。くどくにごそ侍
 るべき。一徳の徳をも。徳者のためにと願ひ。まかう侍らば。なかか徳者の徳をすいませおほし
 ますべき。あはれいみじく侍りける。伊勢の尼の心かなとおぼえて侍り。

(七) 小野宮 徳者にて侍る事

むかし徳者天。にし山の大井川のほとりに。徳所をたておはしまして。徳者と申して。目出
 度くゆ、しきつくりみがるるのみならず。山水木立わりなくて。衆に心とこまるべき徳にぞ侍り
 ける。如月初めの十日のころ。徳はじめて徳者の侍りけるに。小野たかむらも供養し侍りけるに。
 徳たかむらをめされて。徳者の徳のけしきちと侍につくりて。徳れと徳のありけるに。たかむら

宗匠 龍巖人等手。秀玉 龍巖龍巖。と作りて奉りければ。宗匠に龍巖ありて
 宗匠になされにけり。おほくの人を離れて。其の座につき輪ひにけり。ゆゑしき面目なりけんぞか
 し。たかむら龍巖の後。大龍より。龍巖の詩どもをおくりけるに。龍巖人等手。龍巖龍巖。と
 いふ詩侍り。ころろは十こしも龍の詩にたかはず。ことばは明かにはれり。時の秀才の人との申
 しけるは。龍の句なをめでたしとぞほめ聞えける。實に心通ことに面白く侍る。わらびむらさき
 色なればかゞめり。かゞめればものうきにいたり。龍巖手をにぎるかと思えたり。龍巖の龍巖かたぶ
 くと云ふ文は。龍巖大師の龍巖に侍り。秀玉の龍巖のおひ出て侍れば。實にも龍の龍巖を脱けるに
 たり。龍巖に對する龍巖。龍巖にあへる龍巖ありし。實におもしろく侍る。龍巖になし龍巖へる龍巖の
 龍心ばへも。目出たく。龍巖をてらせる龍の龍つもらで。人の龍巖をはかる事。くもり侍りらぬ。い
 とありがたき事になん。されば人をおほく離れて。宗匠につらなりしに。龍巖は一人としても。龍
 をかへすともがら侍らじ。

(八) 龍巖龍巖生龍巖に龍巖門にて侍る事

「むかし字の龍の龍巖。龍巖といふいみじき侍り侍りけり。明月の比。江州竹を龍巖へ人々と

もなひつれて侍りける。はるかに山のいたゞきに上りて。龍巖へいたりぬ。西方見えたりて。實
 に面白き所なり。かゝれば龍巖三千世界。龍巖とつくつて龍巖侍りけるに。龍巖おびたゞしく
 ゆるぎて。龍巖にけだかき龍巖にて。十二龍巖心龍巖といふ龍巖の。人の耳にあさやかに聞え侍り
 ける。龍巖ぞ侍る。實に龍巖山の。はれたる所なれば。三千世界は龍巖の龍巖に龍巖といふも龍巖
 に侍る。それに十二龍巖は心のうちにむなしく侍らん。龍巖すくいみじく侍る。實にも龍巖をらすば
 龍巖ばかりか。かゝる句をばつけ龍巖はんとぞ龍巖侍るに。小龍巖は。人龍の龍巖を脱ばしめて。龍
 巖にいたり。龍巖は龍巖の龍巖にあづかる。龍巖は實にかたじけなく侍る。龍巖も龍巖は十二
 龍巖は心のうちにむなしと云ふ龍巖を。日に三度となへて。龍巖のつとに龍巖にけるに。はたして此
 の心をさとりて龍巖をとりにけるも龍巖がたくつとくぞ侍る。

龍巖のはじめつた。龍巖二月の十日比。内へまいりけるに。龍巖門の邊にて。龍巖に龍巖の
 なびきけるを見て。龍巖龍巖龍巖と龍巖して。下句をいはんとてうちあんせるに。龍巖門の上よ
 り。あかき龍巖の。白きたうさぎして。龍巖おそろしげなるか大なる龍巖して。龍巖龍巖とつけ
 てかきけすごとくに失せにけりとなん。此の龍巖のころろことはたぐひなくぞ侍りける。實にも龍巖大
 龍巖に吹くは。龍巖は四方にはれて。龍巖龍巖と見えて。かせにけづれり。龍巖龍巖はる、龍巖にしあれば。

官能自ら此心長明。其事徒今日不宣。とつくり給へりければ。御水のおもにうかびて。御をながして大なる御して。あはれ世の。すなをならましければとて。御に入り侍りけり。實にもにこの御にてましますは。さこそうあひも侍るべきに。あまさへ左におこなはれ侍る事御にも。御下に心をとりしてこそ侍れ。

、(十二) 大御の御事

むかし御事の御時。大御。事にあたりて。御の御へながされ給ひしに。父子五所にわかれ給へりしかば。なみだにくれて。紅顔さらに見へわかず。やみにまよへるこもち給ひけるに。おりぶしつ御の御事のはかに御へ侍りしかば

御事御事二致末實。夫是御々御事。

時此思世御去日。我御何世御事。

とつくり給へりける。あはれに侍る。實にも大御は御事。御は末實。しかはあれども。おなじく御のそらに身をたよはせり。御に御をそばだて。御屋にかへらむ事をはかるに。御は又のとしての御なり。大御はいづれの年にかあらんと。あはれに侍る。つるにたびにてぞ御事はまかりて。いまそかりしか。そもく又

三月。御事御事。時々御事。と云ふ御事。これは天神の御事なりとて。御事のすまの年。もろこしよりしるし申し侍ること。不御には侍れ。されば御が御にはひろまざるを。御か御として。御には御じ侍りけるにや。御にかたじけなくぞはんべる。此の御事の御には。御の御の外にながれ。御は御山の御よりもしげしなど。いはれ給ひしに。とがもいませざりし御事。御のさかひへ御し御し給へる事こそ。いかなる御事。やらんと御へ侍る。

(十二) 御事御事二致末實

むかし御の御事といふ文章御事。御事をかうぶりて。ながさるべしとて御目なん御下くだると御へけるに。ちからなし先世の御事にこそと御ひ侍れど。としごろいとをしく侍りし。御事も御れがたく御みなれし御をふり給て。御だたん事の。さがりがたく御へて。御こそかやうの御には。あらたなる事ども。おはしまし侍るなれとて。其の夜まいりこもりて。なくなく。よもずから御を御し侍りける。御がたに御の内に。大きにけたかき御にて。御くよばせ給ふに。御のこまにていらへ申してけり。御をせ下さるゝやう。この御事が御事あり。御にて侍れば。御事あるべき御かきて。御にたぶべしと。のたまふ御あり。うけたまはるに身の御よだちて。御なく御へ侍るたるに。ややしはしありて。たてようじめの文を御すの内よりさつとたげ御だ

〔一〕 本任の位并、行平親王の事

むかし四條大納言本任、中納言を罷えて、一階をし給へる時に、かくぞよみ給ひける。

うれしさをむかしは給につつみけり。こよひは身にもあまりぬるかな

實身をたつるならば、さこそうれしくおもひ給ひけり。このことは右衛門督の御時氣に

よりて、本任をこされ侍りけるなり。其の時本任中納言の、御衣をまいらせられけるに、御衣を御

使にて、是はことある御衣なれば、おさむまじきなり。遂に一階をそへ給へと。御下されて、御

えられ給へりし。服をきよむるのみにあらず、御え返し給ひければ、人もめでたき事になん申しは

んべりければ、身にあまるまで服ひ給ひけるなめり。さて、御衣を給につつみ。又身にあまるといふ

事、御本かや。これをそしり罷へん。本任大納言に、あがり給ひて、出仕給ひけるに、さても

三階も、三階の御衣も、いまだおはしませば、いかばかりうれしかり給はん。又なに事もたの

みこそ。罷へんべるべきとおぼすに、いまさらかなしくて。

世の中にあらしましかばと、思ふ人、なきがおほくもなりにけるかな

とうも給ひ給へりけるを、中納言も罷きて、きちやうのきはに、なきふしけるとぞ。あまりにけし

からずとぞ。時の人け中侍りけれども、さも服ひ入れける中納言と罷えて侍る。我が身の御衣に

すむに侍ても、その人あらしましかばと、おぼゆる事いかなる人にもあるべきにこそ。

むかし中納言と云ふ人いませかりける。身にあやまつ事侍りて、御衣の邊にながされて、も

しほたれつつ、滅ぶたひしあり侍りしに、御衣の邊にてかづきするあま人の中に、止まり侍りけ

るにたより給ひて、いづくにやすみずる人にかと尋ね給ふに、此の御人とりあへず。

しら服のよする邊に費をすこす。御土の子なればやどもさだめず

とよみてまされぬ。中納言いとよかなしうおぼへて、御もかきあへ給はずとなん。なみのよるひる

かづきして、月やどれとはぬれねども、心ありけるたもとな。夜になみしく給のうへには、月を

かさねてなれし御衣、そのぬれ衣をかたしきて、身の中にて費をおくる。御人の中にもかゝるなさ

けあるたぐひも、侍りけるとおぼへて、夜にあはれに侍る。けにゆうに侍り。

〔二〕 御衣の事、一井高光殿の御事

むかし中納言の内へまいり給ひて、御比むつましかりける人々のおはする方へ、いでおはし

けるほどに。いかなる事の侍りけるにや。若き上人中納言をうち見て。情なく御へりければ。中納言もくみて。

いづくにか身をばよせまし世の中に。老をいとはぬ人しなれば

と讀みて立ちかへり御へりければ。なみだのみおつるまでにおもひたまへる。よくおもひ入りたまへりけるにこそ。まこととしたぬればころもかはり。つきづくしくなるまゝに。人にはいとほるゝに侍り。不老門にのぞまねば。老をとどむるにあたはず。もまたおのをいとへば。さては意いぬる身をば。いづくにかおかんとなげくに侍り。されば老人は老人を友としてこそ侍るべきに。それは又むづかしくて。若き友にまじらはほしきことに侍るなり。しかればこれも老若のかずにや。入り侍るべき。

むかし高倉のつかさ申しけるに。かなはで歌きにしづみ給ひけるころ。九月十三日の夜に。月夜歌といふ歌にて。内裏に歌合の侍りした。かく

かくばかりへがたく見ゆる世の中に。うら山しくもすめる月かな

と讀みてまいらせられければ。情しきりに御かんありて。若き歌になさせ給ひにければ。歌は人のよむべかりける物かな。心の中の思ひ入るやふをも。歌に出でさらましかば。いつもしづみて

はるゝ貴あらじとて御ひ給ひける。實と讀えてあはれた侍り。

(三) 公任の御歌三人名歌

むかし。村上の御のすあころ。御月中の十日のはじめつかた。雲いみじく降りかされて。月

ことにあかくて。御王のそのにいらされども。四方にみち。夜、公が御にのほらねども。

月千里をてらす。木ごとに花さく心ちして。御れを御とわきがたきに公任の中納言をめて。御の花

折りてまいれとて。御はされけるに。御なく御をもちらさず。折りてまいり御へりけるに。御いか

がおもひつると。御の有りけるに。かくこそよみて侍りつればとて。

しらんくとしらけたるよの御に。御かきわけて御の花をる

と申されければ。大に目出させ給ひて御に就じて。ゆゝしきまでに御の侍りければ。公任は

の御にてけしからぬまでに御せられ侍りければ。主上も御せきあへさせおはします。公任は

のかくまで御し召しけるが。御さに御をしほられければ。御は中納言の心をはからせおはしまして。

御をぬらさせ給ひぬる。御なく侍る。御中納言の御出は。是に侍りとて。のたまひ出づるたびには。御をしりて。こそぞかりける。こそぞあるべけれとおほえて侍れ。すあの際には。かやうのためしもあるまじに侍りたす。

ておはしけるが。歌はおもしろし。實方はおこなりと。のたまひてけり。此のことは實方もれ聞
 き給ひて。深く恨みをふくみ給ふぞと聞き侍る。世間聞かぬれさせ給ひて。又のとしの實方と
 いふ御身の。彼の御所へまいりたりけるに。人は御の色ありて。形姿の人も侍らねども花は思ふ事
 なく去年にかはらず咲きみだれたるを見て。

こそみしに色もかはらず咲きにけり。花こそものはおもはざりけれ

と讀みたりけるを。御方の聞き給ひて。上の句はめでたけれども。下の花こそその句。すこし心にもか
 なはず。ひてふ御方の心ちのし侍りとそしり給ひけり。實方此の事をほの聞き侍り。歌にとりつくろひ
 て。御方の御所にまふでて。人を尋ね出でて。いと恨なき事に侍れども。申入るべき事の侍りて。
 まいりたると申させ給へといふに。御方聞き給ひて。此の歌の事いふべきにこそなと心給ひて。今
 まざるゝこと侍り。例わざにか侍らんとたまひければ。實方かくと申させ給へとて。花こそやど
 のあるじなりけれとはかり。いひて出でにけり。御方聞き給ひて。をちあはれぬとぞ。のたまはせ
 はんべる。花こそと云ふ句をかたぶき給ふと聞き侍り。御方の又御方の歌の花こそは。いかことが
 めけるなり。但し中納言の御し給へるは。去年見しに色もかはらずにけり。といふまではいか
 なる御方の句もつきのへきに。花こそはおもはざりけれ。といふ無下によはき句なりと。そしり

給へるにこそ。たゞ花こそといふ。こそをにくみ給ふにはあらじものを。しかるうへは御しにか。
 御方の歌にはひとしむべき。

むかし御方といへる歌よみの二月の比。こしの方におもむきけるに。山に雲そびきて。木々もこ
 と見へわかざるに。雲のおほく積りて見えければ。

雲のあるこしの白山おひにけり。おほくのとしの雲つもりつつ
 と讀み侍りける。いと目出たく侍り。

(五) 御方御方

むかし御方と聞へし歌よみの女。世中すぎわびて。御にも住みうかれなんどして。貴にふべきた
 づきなまなく侍りけるが。うづまさなまいりて。心をすましつゝ。つとめなんどしてかく。

なむやくしあはれび給へ貴の中に。有りわづらふもおなじやまひぞ

と讀みて侍りければ。御方うごき侍りけり。其の夜のおかつきの御に。貴き御のおはして汝の歌の
 身にしてみて。思しめざるれば。貴にありつくべきほどの事侍べるし。此のおかつき給ひてまかり出
 づれば。もし道にて思はざる事侍るとも。いなぶ心有るべからずとみつ。あはれ御なき事におほ
 えて。やがてまかり出でぬ。なんとなくくるしきまゝに。ある古堂の人もなくて侍りけるに。立ち

入りてをがみなんどするほどに。圓圓のりつれて。ゆゝしげなる人のとをり侍りけるが。何とか思ひけん。此の堂に入り侍れば。伊勢すべきかたなくて。うしろのかたへ侍るに。此の中のあるじとおぼしき翁のおゐきて。かやうの事申すにつきては。おかり侍れど。御の御つけ侍りて申すになん。我がすむかたさまをも御らんせられ侍れかしと。ねんごろに聞え侍り。是をたがへん事。御のおぼしめさんもおそろしくおぼえ侍るまゝに。なびきにけり。ことよろこびて聞にのせて。男山に見しむたりぬ。入道翁の御説にてぞ侍りける。いつきかしく事かぎりなし。子どもあまたまうけにければ。わくかたなく。わりなきものに思ひてぞ侍りける。この御説も御比あひなれ侍りける。つまにわかれて。見めかたちのあでやかに。心さまのわりなからん人かなと思ひなげきけるに。此の御説をえてければ。心のまゝにぞ侍りける。

(六) 男山翁の御説の事

むかし伊勢と聞えし。歌よみの侍りける歌に。花のいみじう咲きたりけるに。大商人むれきて。はなをけうじて日の山のはに。かたぶきぬるをなんなげき侍り。花七日をかざる。其の歌はとひくる人も侍らじとおぼへて。

花のどの花見がてらにくる人は。歌りなんぞ歌しかるべき

と歌ふ侍るも。げにとおぼえてあはれに侍る。山は花こそやどのあるじなれと。よみけん心して侍り。

花山の翁のおこり給へるころ。御説の御説の歌かたより。紅葉のことに色もたはひも御説に侍りけるを。一被まいらせけるに。御説に。

色香をば思ひも入れず御の花。つねならぬ世によそへてぞ見る

と歌ふ御ひける。花も食も食ならましかば。花にも香にも。心をとめまし御を。實に御説を思しめし。しめさせ給へりける。いと歌なくぞおぼえて侍る。御説の御説も。歌にあはれに思えて。いませかりけるまゝに。すゝろに御説をぬらさせ給へりと。つたへうけたまはり侍り。

むかし一御説の御説もにて。人々歌歌し侍り。

歌はなを夕まぐれこそたゞならわ

といふ句の。出来たりけるを。人々歌歌に思じて。度々になり侍りけれど。つくる人も侍らざりけるに。御説の御説に御説とて。十三になり給ひけるが。

歌のうは御説のした

と侍り給へりければ。御大きに御かんありて。是をばうちこめては有るべきかとて。又の日の御説

言ひたすけさせ給へんと。御意に給へるに。此の物の何かはたゞりなすへきとて。かきけしうを傳りぬ。さだかにいかなるものゝ害とは。見えも覺えずと。御の給へりけり。御門と見なんにや侍りしか。

(九) 行儀正徳

むかし一御所の御時。平家朝の御正行儀と申す人。いまそかりけり。平家の行儀入りしくなりて。御時をよみ給へる事。いくたびといふ御をわかまへ侍らす。御の御儀にこもりて。御は御心よりて。大なきに御たえず。花は合衆にひらひて。朝にもよらずして。三年をおくれり。天のかく山に御りて。御の御儀を十方に御じ。御時を御のうちにみちて。ふとせをす二十行儀の一方にかざり給はず。御の御儀のそとはに。

御の御なり御けしと思ひけん。もらぬ御も御はぬれけり

と御を御めて。其の御きりくもすふかれて。すえの貴までのこり侍るぞあはれに侍る。ぬしは今はいづれの御士にかゝますらん。御はひとり事御の。御に御りけるこそ。御ひ入り侍るにあはれにかなしく。御もところせくまでに御を御れ。御にていませかりし御の御正行儀。御の御儀にこもり給へりしとき。御の御正の御の見えけるに。御の御かしも御しく御の御の御を御しく御ひけり

ひければ。かたはらに御きそへ給ひける。げにもらぬに御はぬれけるとありしを思ひに。さてもゆかしかりける人々の有りさまかな。と御へ侍り。かゝるゆゆしき人の御のかたはらに。つたなき身にして。又御も御もたらはぬ大御こと御を御きそへん事。そしりもおほかるべきうへ。其の御れも侍れども。事の見すごしがたふ侍りし中にも。御ちえんもあらまほしく御へて。

御もらぬ御も御はぬれけりと。御かすばいかにあやしからまし

と御きそへてまかりすぎし事。なをく其のおそれ侍り。しかはあれども。一つはちすの御とも。今の御の御にはなれかしと思ひしは。御がくれのなき御までも。御をそばむる事なけれ。御も平家御正の。目おどろきて人申し侍りけるは。御上人と。内にて御の御し給ひけるに。御上人の。左の御手のかどめりけるを。御正。それは何とてかどみ給ふにかとひたまふに。是はおさなくて衆人より侍ちて打おりて侍るとのたまふに。さらばなをしてまいらせばや。いかにとのたまふに。さもあらば。然るべき事にこそと侍れば。さらばとて。不審御の御時をじゆし給ふ事三三三。いまだをばらざるに手のかどみなをり給ひにけり。御も御も。御正も御も。御も。しかのみならず。一御所の御儀の時大御より。瓜をまいらせて侍りけるに。御忠と云ふ御の御ふし御にさぶらひけるが。此の瓜の中に。其の一つには大なる御をふくめり。くいなん御は。やがてうす

べしと申す。此のよし書にぞうし申るに不慮の事にてこそ。申す事もある。かれをせめて
 申明と云ふ事をもめされて。此の瓜の中だ。いかなる事かある。うらなひ申せと申せ下されける
 に。申明ほどなく。大なる事ありと申す。さらば行儀に申らせよとて。めされて。申明にて申り
 申すに。やゝ時もかへず。おほくの瓜の中に大なる瓜一つ。無量より二三尺ばかり。おどろあがる
 事ありにて。はては中より二つにわかれて。一尺あまりなる瓜一すぢはひ出て。申明死にけり。いと
 不慮にぞ侍る。上古もかゝる事をきかず。末の代にもあるべしとも申す侍らぬ事ぞかし。申明、
 申明、行儀、時の節目ゆしくぞ侍りる。今の世の下りて。かゝる目出たき人々もおはせぬこそ。
 書をそむける事なれど。ものかなしくおぼえて侍り。

(十一) 侍大新官の事

さいつころ。侍大新官と云ふ人おはしましたしける。壯年より新をこのみて。新はひとりも。
 新は友にまじりても。是を興じて。日々にしたゆる事侍らざりけり。あるとき新官にて。新に心
 をとめて新官へりけるに。いづくの事。いづかたより来たたりともしらの小川の。ふめことがら
 あでやかなる。うすくまりて侍る。大新官あやしふおぼして。新にかたがたおぼしたるは新のい
 なり。新のめでたくけ新官にまじりて。新の事をあらはすになんとて。新すやうに夫をにけり。夫

の彼も新官の事なる事ありて。目もたしかず新を見て侍りけり。いとよし新に侍る。その
 たる事をはきて。新官の事のかうらんにて。まりをけ新へりけるを。夫の新官。あままし
 う。うつと心なく新官をひて此の事いさめんとて。よびよせ新ひけるに。たゝみのうへ玉はかり
 あがりておはしければ。新人にこそと新ひければ。手を合せておがみて。のを新ひけるを。な
 りみちも大におそれ新ひけるとぞ。彼の大新官のたまひしは。新は新官の事。女子の事つ
 れづれをなくさめ事らんとて。新官のつくり出し新へり。女子の事。めでたくおはしまし
 けり。新ほど一時は人もめされて。新の事をもさしはして。新あそばしけるに。新は千人が
 のし侍りけり。新は三世の事新たちの。あそばすともしりがたく侍り。新し新官には。其の新た
 えにかうはしと新し侍りぬれば。新もほとけたちの。あそばしけるにこそ。いと目出たたくたと
 侍り。

侍大新官。新官中侍官とて。新官の事新官の事なる人。いまそかりしが。申され侍りける
 は。新の事新官などへ。新官さんには。新もしは新の事。三にわかれたらん申の事。いたく
 引きつめて。つけつゝ木の枝を上になして。新三のかゝりの木にあゆみよりて。新のひさをつきて
 手をのべて新侍るべきなり。大方まりは。いかにも新かたちをととのふべし。新はたと新官の。

まもんのたがはぬ顔なり。かゝりにつたはんまりをば。腰を出して。いかにまもりのつよくあたる
 べし。腰さじとこしらへ。身が重きも。つくろひ侍らん事は。膝下にて侍るべき。まりをつまけて
 久しくもてる事は。からくには。しかりといへども。身が重はこれをあしきたし侍り。三足おはか
 らば。五足には腰を侍らし。すがたをばととのへ侍らで。腰ばかりにあたらんとし侍るは。腰苦し
 きわざにや侍らん。腰につたふまりは。上をはしり侍れば。のへにおつるなるべし。しかあれば左
 のひさをつきて右をのべんに。たより侍り。腰にかゝるまりは。腰にしなひて。おつる事なかまう
 なり。さればいかに。こしをそらし。身をたをやかにして。まりをうだき侍るべしとぞ申され
 ける。此の二人は。まりのせひを見るまでは。いかゞ侍りけん。末食にはありがたきほどの人ども
 にて。いませかりけり。されば侍大野宮だ。あひまとり給はずとこそ。腰もほめ給ひけれ。身が
 腰の重くらものはじめに。腰まりあそびのありけるに。まりを腰に出されんするありさまの事を
 ば。侍大野宮なりみちの。其の人にあたりて。いませかりけるに。いかなるさばかりのはんべりけ
 るにや。目のたけぬるまで。まいる給はねば。侍大野宮の腰のはかりにて。腰のえだにまりをつ
 けて出されけるに。なりみちのきやう。まいるあひたまひて。あしきとよ。腰のはじめの。腰の
 まりをば腰のえだにこそとてつけなをされはんべり。腰はこつまよどりにして。腰をこむるは
 に見えさんめり。やなぎははるのみどり。なににもまさりたるなればなり。そののちはるかに年へ
 て。腰大十にかたぶきたまひて。腰二腰の腰のはじめには。腰まりあそびの時。腰大野宮
 の竹のえだにまりをつけて出されけり。侍大野宮つたへ腰を腰ひて。此の人父のとしたと中野宮
 にはまさりにけりとほめ給へり。されば侍大野宮のいとまはどひとよらははは。いかにとしてせしり
 はんべるべき。

をとめて、（一） 夜更をひきけることくにてや。いませかりけん。また（二） 悪徳なんどにおちさせ給へりけるにや。又（三） 實には實成の明神の生まれかはらせ給へりとあや。八幡の工（四） 悪徳あらたなるじけんをいませりしうへに。こま人のことばに化人とこそ（五） 悪徳を侍りしかば。實の明神にて悪徳をもひかせおはしますにや。

（二） 悪徳の明神化の事

むかし（一） 悪徳の明神といふ人いませかりけり。實（二） 悪徳ささら悪なきのみにあらず。實の明神をもつて。四方のうき實。心の中（三） にきやし給ふ人になんおはしけり。しかれども生あるものは。あならず死する實のさがなれば。七（四） 徳にかたぶき給ひてのち。實（五） 悪徳にて實身（六） のまかりけるに。むねのあいだに。實（七） 悪徳は二本はんべりけり。かたちけなくそはんべる。此の事實に聞えしかば。實（八） 悪徳より實の悪徳をめされけるに。實（九） 悪徳の實徳せんざして。まいらすまじきよしかたく申しければ。さらば一本をたてまつれと實（一〇） 徳を下さるるとき。實（一一） 悪徳の實徳て一もとをまいらせてけり。實（一二） 悪徳二本をば實（一三） 悪徳にこめ侍りぬ。實（一四） 悪徳の初れたる實徳は實（一五） 悪徳の大徳の。實（一六） 悪徳の外實にていませかりけるほどに。實（一七） 悪徳の實徳へ侍りけるを。實（一八） 悪徳の實徳に代り實（一九） 悪徳の實徳におさめられ侍りけり。此の實徳をびやうどうみんのほうざうにこめさせ給へりけるには。大徳（二〇） 悪徳ゆきなり。實（二一） 悪徳にたつて。實（二二） 悪徳を侍りて實（二三） 悪徳を給へり。此は

さらさら中の十日のほどにて侍りければ。實（一） 悪徳の實徳の上に實（二） 悪徳かよりて。實（三） 悪徳にしらぬ實（四） 悪徳かとうたがはれ。かざしの實（五） 悪徳の實徳にかかると。二月の實（六） 悪徳ころもに實（七） 悪徳つと實（八） 悪徳けん。これならんとおぼえておもしろく侍り。

（三） 悪徳の明神化の事

實（一） 悪徳の實徳とき實（二） 悪徳の實徳のこほり。ぬかふたと云ふ所に。實（三） 悪徳の實徳といふ實（四） 悪徳侍り。下れるきはの實（五） 悪徳は。さし實（六） 悪徳の實徳の實徳を立つるはからひのみにて。實（七） 悪徳の實徳心にかげさんめるを。ともなりしかるべき。實（八） 悪徳の實徳や。日（九） 徳をへて實（一〇） 悪徳しけん。實（一一） 悪徳の實徳をふかく實（一二） 悪徳じたてまつりて。しづか山田をかへすにも。實（一三） 悪徳の實徳をとなへ。實（一四） 悪徳の實徳をこくにも。此の實（一五） 悪徳に心をかけたてまつりて。實（一六） 悪徳おこたる實（一七） 悪徳侍らず。しかあれども實（一八） 悪徳はのがれぬ事にて。五十有餘の實（一九） 悪徳の實（二〇） 悪徳より。實（二一） 悪徳の實（二二） 悪徳にふして。實（二三） 悪徳くれ實（二四） 悪徳きて九月ばかりになりけり。日（二五） 徳をふるままに。實（二六） 悪徳おどろくしくふかれて。苦しきことたとへていふべきかた侍らざりけり。其の時實（二七） 悪徳成おもふやう。實（二八） 悪徳の實徳をたのみ。實（二九） 悪徳の事は。實（三〇） 悪徳にのぼりたりし時。一人不成（三一） 實（三二） 悪徳の實徳成實（三三） 悪徳成中不（三四） 實（三五） 悪徳の本實（三六） 悪徳成大徳として二徳の實（三七） 悪徳成をすくひ給ふ生（三八） 實（三九） 悪徳成死（四〇） 實（四一） 悪徳成以（四二） 實（四三） 悪徳成實（四四） 悪徳成令徳と實（四五） 悪徳成かれて。實（四六） 悪徳をやめさせ給ふなりと。實（四七） 悪徳法の侍りしを實（四八） 悪徳成はさみて。今よりは心になかく實（四九） 悪徳本實（五〇） 悪徳成るを。實（五一） 悪徳を實（五二） 悪徳して。三十年の實（五三） 悪徳。毎日五（五四） 實（五五） 悪徳成實（五六） 悪徳成をかき。實（五七） 悪徳成る事なく。實（五八） 悪徳

き。このみすてがたかりしうへに。此のおろかに即ち歸の時。もれても人の身の上よしあらば。か
 しこむかしを並び給ひて。一應のたねともなしたまへかしと思ひ侍りて。尋常するに侍り。古
 きたくみのことばき。いやしげに思なすわさの傳ながら。よろづの罪をも此の事の二にかたざ
 りて。事かくれなき事までも。我をそばむるわざなかれとなり。

〔六〕 實徳の尼誕生の事

真心の徳に。實徳の尼といふ人侍りけり。年比あさから十思ひけるあるじにせくれ。やが
 てさまかへ小師といふ山屋にこもり居て。地蔵菩薩を本尊として明行ひ給へり。あるとき夜ふくる
 まで。心をすまして静めうちし。かならず誕生たすけ給へと。いのり申されて。うちいね給ひける
 夢に。此の地蔵菩薩おはして。いかにもたすけむするぞ。其れにつけても。つとむる事ぞ。おうくすな
 と仰せらるゝとおもひて夢覺め侍りけり。其の徳はいよく心を静して。むらなくつとめおこなひ
 給へりける。しるしありて。さいご臨終の夕に。正しく臨終さらしたなびき。天花交下りて誕生
 の實徳をとけ給へりける。年すくもいみじく侍り。此の尼われつ々侍らば。尋常侍りて實徳の
 知識となり給へと。真心の實徳に侍り申され侍りけるが。實徳の山にあいだ。實徳に侍りて此の實
 かざりと見え侍りければ。日比いひ侍りて侍れば。實徳にかくと聞ゆる事。住山の實徳下りて山

より外へ出る事かなふべからず。實にたすけ給りて實徳本へおはし侍り給の事も聞えんとて有
 りければ。心ちもきえ入るやうに覺え。身も例へならざれども。たすけ給せて實徳本へおはしける
 ほどに覺にてつるにはかなくなり侍りぬ。實徳まちえて實徳本に。はやこときれにけり。實ま
 しく心うしともいふばかりなし。實もしやと覺え給ひて。實徳の實徳正の實徳に死せる人をか
 き入れさせ實正に侍りして實へ給へとあれば。大にかたき事に侍り。さりながら不動の實をみて給
 ふ實徳實徳を念じ給へりける。實徳十思にみたざるに思いきかへり侍りて聞けるは。不動實徳の
 實二の手を叩きて實徳より思ひしに侍りとぞ申されける。其の彼六年をへて。思ひのごとく給
 徳の教化に預りて。本意のままに往生し給ひてけり。實徳實徳はしらす。既に實徳の實徳に侍り
 る人の。いさかへり侍るほどの實徳はありがたくは侍らずや。實もさるほどのいみじき人をしたし
 き方に侍たらば。なにしか實徳をもしそなはかすべきと覺え侍れども。更にかひなし。さる實徳實
 人を見にても。前にても侍たらましかばなん。何とあらんなど案じあたるは。實徳の時に實徳の矢
 をはげ。實徳のまを射んとするにたがはず。又實徳おろかにして。ふかきさきからもなければ。たゞ
 信心をおこして。ひたすらに實徳の實徳をもとなへ。奉るべきに。たゞ實徳うくしてのみ實徳に侍りた
 づらと。たけぬる事のかなしさよ。さても實徳の尼のありさま。實徳に侍りて侍りた。心も實徳

ておはしけんと思すくうらやましく侍り。おろくく天宮の御座を仰ふに。海のはとりにて。よりくる波に心をあらひ。舟の御座に思ひをすませと侍り。白雲のよによるふちをふみわけて。とひくる人もまどをなる。あさの衣に身をまつして。ある時はとふかとすれば。湯を行くむらさめを御に聞き。あるときはなるままにあらて行き。たかねの嵐を友としても。舟の御座を思ひしりて。しづかに御座していまそかりけん。實に此の貴より御の御とおぼえていふじくぞ侍る。されば東大御の御かとお。所の御座これ大なる御座なりと。心は水のごとし。かつは御にしたがつてすまにごりの侍るべきにや。あやしわれらにいたるまでも。深山の住居とて何となく貴に思侍りし。そのかみには御す。心もすみて侍れば。貴の御座にこそと覚えて侍り。深山おろして御座めて。實もよほす御の御。實にもとあはれに侍り。

(七) 東大御

むかし平の京に御女すみけり。いたく思ひ下るべき御の人にあらざりけるなんめり。深山に有りて御座の御をよみ。竹園に御みて。御座のうけ御ふ事とせし人にていまそかりけるが。身くるしくまどしく侍りて思御かれんくになりて。思かけて侍りけるなり。しかあるに年なかはたけて御。御めて一の御子をまよけて侍り。ふめことからのわりなきに。御座のいとをしむ事。今一きは色をま

して明けても暮れても大御の中におきて。貴のまづしく思しきわさをも。是にて御本侍りけるにはからざるに夫。貴心に御ひて身まかりに侍り。御もおなじみちにと思し侍りし事。御りにもすまてふえ侍りけれど。日御のつもるままだ。思ひもいささか思るけ侍るめるに。貴のいとまたえしさに。いける心ちもせで御座はねをのみなきて侍りけり。此の子十一と云ふ御座だいふやう。たえなくしき有さまに。貴をばごくみいとなみ御ふも思しく侍り。又かくても行すまいかなるべしと覚えて侍らねば。はやく貴にいとまをゆるし御へ。水のそこにも入るか。また御をもごひても遠方にまかりなんとかきくときいふに。御いとを思しく思へて。故座におくれて一日片時も。いきて有るべしとも覚えて侍らざりしかども。そちに心をなぐさめてこそすく事にてあれ。貴の中のあるにもあらず。まづしきわさは。實にこころ苦しく侍れども。さればとて又。命をなき御になすべきにあらずなど。ねんごろに御もせきあへず御本侍れば。此子ももろともになみだをながし侍りけり。御此の子當に御の御座に心をすまして。御の御座するほどの果敢あたへ御へと。御り侍る事を三貴の御座の。あはれとみそなはし御ひけるにや。十三になりける年。御座にめされて。御いとをしみわくかたなく侍りければ。御のまづしき住家をも。ことなく御御ひ侍りけり。さるほどに御日御の御たしりありて。山御寺に下りて。かさりおろして御座とぞ申しける。御座を御むかしにも

ければ、中中とかくの事柄せらるゝに及ばず。御なみださるにせまあへさせ給はず。ちかく侍りける人々、御座は座を立ちて、御座をあげてまけび。あるひは御座をせむむかひ。御座は御座の御座にありて。なきあり給ひしわざ。實に御座に侍り。やゝほどへて大層なくくのたまはせ侍りけるは。かくばかり思ひとるべしとは思はざりき。凡夫ほど口惜しき事はなかりけり。かゝらましとだにしりなば。御座あながちにいさめましや。是はされど御座かよと。もたえさせ給へるに。此の御座をせまかねてとかく御座のたまはする事なし。今はいふかひなし。御座をばなにとか。いふと。御座はせたまふに。行儀と申すと聞と給へりけるに。大層御座をかたづけ。今更かゝる名を聞くべしやとて。なかせ給ひけるにそこばくの人々。つゝます御座をあげてまければ侍りし。かくてはつべきにあらざれば。御座は御座の御座ありて。御座を御座にけり。此の御座のありさまうけたまはるぞ。御座に侍りしみてあはれにはんべる。三野山の御座名たかく聞ゆる。御座のうらはの末にむすべる身にしあれば。しばしのほど。かりそめの御座なりとも。いやしき事の下御座には。御座はおかじと思ひ給へりける。御座御座心ばへにも侍らずや。しかも御座は十に六つばかりあまり御座へりけるとやらん。行す身はるんくとおの御座はんまゝのかしこき。御座のやられて御座となく。十よろに御座のこぼるゝに侍り。御座御座りて御座のしらす。御座御座のしらすとも。御座はし給ひていませかりける。御座上人に侍りての

御座といふ御座におはしませけるが。御座御座のためにとて。天の山にまかり侍りて。御座御座をいはず御座上下を御座す。御座の御座あるやからを御座めて。御座御座の御座をさづけ侍りける。御座へ有がたくぞ侍る。御座を御座して山に御座すと侍るも。御座はたどきを御座にしてまざる。事なからんとにこそ侍らめ。かゝるも心のす見えぬ御座の事なり。されば御座上人も御座のすまひは心すむと侍り。御座心のとままりいてんのちは。たとひ御座御座見たらん所なりとも。なじかは何るべきな。ますくこそ心は御座侍らめ。御座御座の心にしつまつて。よかき御座を御座の御座に御座を御座へりける。御座にたつとくぞ侍る。

〔九〕 御座御座の御座の御座の御座

は往御座御座を侍りしに。もろこしの御座御座。御座のためには御座の御座に侍りて。大層御座にありたてまつりて。御座を御座かりて御座御座といふ所だ。ひとりこもりて。御座を御座にうつされ侍りしほどに。はかなき御座のさかひにて。うせられ侍りき。御座の御座の御座の御座といひし人。たとせをへて。御座の御座に御座られて侍りけるが。御座の御座はつかなしとて。御座御座にたづけね侍りけるに。御座御座して御座御座とて。御座かたひびて御座の御座を見ます。御座の御座はせせとちて御座のいさくかなしび。御座御座すさまじく御座きて。うづら御座に侍り。あれたる御座を見るに。御座

もしろの二重のふしとし侍りき。このあるじの御女。今は四そぢあまのにもやなりの御らん。ふ
 めことからさもあてにやさしく侍りき。御女などとなき事どもかたりし中。此の御女のいふやう。
 いとけなかりしより。かゝる御女となり侍りて。年ごろそのふるまひをし侍れども。いとほひなく
 おぼへて侍り。女は御に御のふかきとうけたまはるに。このふるまひをさへし侍る事。實に御の貴
 の御女のほど思ひしられ侍りて。うたてしくおぼへ侍りしが此の二三年は。此の心いとふかくなり
 侍りしうへ。年もたけ侍りぬれば。ふつにそのおさをもし侍らぬなり。同じ御守の御なれども。夕
 べは御のかなしくて。すまろになふだにくらされて侍り。此のかりそめのうき貴には。いつまでか
 あらんずらんと。あぢきなく御ゆ。あかつきには心のすみて。わかれをしたふ御の事など。ことに
 あはれに侍り。しかあれば夕には。今宵はなばいかにもならんと思ひ。あかつきには此の夜あけな
 ばさまをかへて思ひとまらんとのみ思ひ侍れども。年をへて思なれにし貴の中とて。御山の御の心
 ちして。今までつれなくもやみのかなしさとて。しやくりもあはずなくめり。此の御守くにあはれ
 に有りがたく思えて。御守の御しほりかねて侍りき。夜明け侍りしかば。御守はおほく侍れども。
 御守をちぎりて思れ侍りぬ。御かへる思すがら。貴く思へて。御女かなふだをおとしけん。今更心
 をうごかして。草木を見るにつけても。かきくらさるる心ちし侍り。御守のたはぶれも。御守

御の御とは是かとよ。かりのやどりををしむ御かたといふ。こしおれを御よまさらましかば。此
 の御女のやどりをかささらまし。かゝらばなどてか。いみじき人にも御侍るべき。此の御ゆへに御
 もいさゝかの心を。御女のほど思し侍りぬれば。御上御守の御もいさゝかなどか。貴さざるべきと
 思しく侍り。御やくそくの月たづねまかるべきよし。思ひはんべりしほどに。上人の御より来て。
 うちまぎれてむなしくなりぬる本家なさに。たよりの人をかこらひて。御思はんべりしに。かく
 申しおくり侍りき。

かりそめの貴にはおもひを御すなど。御きし言のは御られもせず
 と申しつかはして侍りしに。たよりにつけて其の御事侍りき。いそぎひらひて侍りしかば貴にもお
 かしき手にて。

忘れずとまづ聞くからに御ぬれて。御身ものいふ御の貴の中
 といふて。又おくにさまをこそかへ侍りぬ。しかはあれども。心はつれなくてなんとかきて。又か
 く

御おろし貴の色は御めり。なをつれなきに心なりけり
 とかひて侍りき。見しになふだすまろにもろくて。御にうけ御て侍りけり。さもいみじかりける

なみだをながし侍りき。ひたひに指の血を垂れ。山に雲をたれて侍る人も、血の跡をしる人は少くなく。雲に血をいはずるたくひは、雲なんめるぞかしな。雲は二層より舞し。雲はつぼめるに雲ありとはかやうの事にてしられ侍り。さても其の日の雲に。六層の雲に心をとむなと侍りし事心にいみじくしみて。今にいたるまで。いたくさかひに雲ひをとどめ侍らぬなり。されば雲のおほくの雲の中に。雲雲雲のむねをとかれて侍り。雲はたど。大層の雲に雲する雲ひを雲らむとにこそ。此の雲雲の雲雲雲しよりも。たつとく内雲かけ。雲雲ありと見え侍りき。そもそもつるでももつて。雲の中を雲るに。雲雲の雲雲をいとむ雲おほし。雲雲山のけぶりたへせず。雲雲山の死人雲雲。あはれかな侍れの時にか。雲雲雲のはとりを雲をさらしてむなしき雲雲のみのこさん。かなしきかな。いかなる時にか雲にうづまれて。はれぬ雲のくもりそめけん。雲の雲ともたらん。あしたの雲きへやつく。雲の雲の雲雲雲にあらす。雲雲の雲雲かへつて雲のえんとなる。雲の中に雲ひをとめて。生死の雲雲をおもはざる口をしきには雲らすや。雲も大層の雲に心をとどめじと侍れども。雲ひなれぬる雲雲のなをしたはれて。まなこをひらけば雲雲あてやかにて。心をとどめし。雲をそばだつれば。雲雲雲しなくにして。雲ひをすいむ。雲雲にかたきに雲侍れども。雲雲は心の雲雲なり。心をはなれて雲雲おむがくある雲雲なし。雲雲雲は。心の雲雲にて

じつにあらすば。雲を雲せるころ又なるべし。しかあれば。いづれと雲ひを雲し。いづれにか心をとどめんな。雲雲は雲として。取むらことにおくといへども。雲雲はこれを雲す事はずしとは。雲雲の雲を雲ひければなり。雲ももてる雲雲なれば。けにくく心になりいで。雲雲雲をあらはして。大層の雲に雲ひをとめずして。雲雲を雲し雲へ。

(十三) 雲雲雲雲雲雲

其のむかしかしらおろして。雲雲雲にまいるあり侍りし中に。雲雲雲上の雲はり月の比。雲雲雲にまいる侍りき。雲雲雲かより侍りて。入あひの雲のこ雲雲して雲雲びしきありさま。木すれのもみちあらしたくふすがた。何となくあはれに侍りき。雲雲雲にまいる侍りて。雲雲雲などたむけ侍りて。あたりを見めぐらすに。尼ころろをしまして雲雲雲をすりはむべり。あはれさにかく。雲ひ入りてするす雲雲の雲雲雲。おほえすたまる雲雲かなみだかな

と雲雲侍るを。雲雲雲此の雲雲雲をあけて。こはいかにとて雲雲にとりつきたる雲雲れば。雲雲雲雲雲雲の。ちぎりあさからざりし女のはやさまかへにけるなり。雲雲雲しく雲雲雲へいかにとて雲雲雲に。しばしは雲雲雲にせけるけしきにて。とりて雲雲雲なし。ヤト雲雲雲へいかにとて雲雲雲は。雲雲雲雲雲雲のしのも。何となくすふうかれて。雲雲雲の雲雲雲すふうになみだをもよほし。あ

まつるにも及ばず。此の十々廻りむなしく年をおくり歸へりと。ほのうけたまはり侍りき。はや
 歸國していまそかりけるが。此所にて歸り歸ひけるにこそ。かへすくあはれに歸へ侍り。一事
 の實主として三千の國使にいつかれ歸ふべき人の。各々の歸ひをふりすて。人にはくづの國使と
 よばるゝ心をしめて。歸國の時歸をおぼへ歸ひけん。返すにはあらずや。高僧たちのむかしの
 歸を國にも。又はけがさじの古へは。歸くも心のすむぞかし。此の國使の歸は。なをた
 けありてぞ歸り侍る。食をすつとならば。かくこそあらまほしく侍れ。あはれかなしかりける心か
 な。かりそのの國使に歸かれて。國使の心をよそにする事。そもく今生むなしくはせず
 なば歸をもつてか人衆の歸ひでとせん。それ六國のかたちなくあれども。國使となり。國使に
 あへるは人身なり。此の身をうけぬる時。いかにもはげめてむかしの五國十國のよきたねをもうる
 はすべきに。たゞいたづらにして。きのふもくれけふもたけて。ひつじのあゆみちかづき生死
 の白雲をいたゞきぬる事のかなしさに。歸く國へ歸きちかく身にふれしむかしのかしこきこと。ま
 のあたり見侍りし中にも。いみじき人々をかきのせて。歸はかの人々のごとくならんと成す。且
 は國使の友とせんとて。九國にしるしの侍り。此の中に何となき國使のしなくなる。國使
 を入れたり。歸たゞとして。むかしの歸ひしく。心とまると。返すに。まめやか

のすまろことをものせ侍り。國使の事國使のことばに。國使の事なしといへども。國使
 思のちからありと侍れば。おなじく歸つらぬ中のごよだんは。國使の事なしと侍り侍り。一
 事はおほしといへども。九國として歸するし。千國萬國二國ごつ々の下の事なり。國使の
 の方々のいはにしてしるし侍りぬ。

(11) 其の十の力) 其の十の

(12) 其の十の力) 其の十の

(13) 其の十の力) 其の十の

(14) 其の十の力) 其の十の

(15) 其の十の力) 其の十の

(16) 其の十の力) 其の十の

(17) 其の十の力) 其の十の

(18) 其の十の力) 其の十の

(19) 其の十の力) 其の十の

(20) 其の十の力) 其の十の

(21) 其の十の力) 其の十の

(22) 其の十の力) 其の十の

(23) 其の十の力) 其の十の

(24) 其の十の力) 其の十の

(25) 其の十の力) 其の十の

(26) 其の十の力) 其の十の

(27) 其の十の力) 其の十の

(28) 其の十の力) 其の十の

大津宮に遷す。... 天智元年(672)...

(三六)【いしの方】 大津宮の古名...

(三七)【みなれ水】...

(三八)【東大寺】...

大津宮有る寺... 天智十七年...

(三九)【かえくらすこし】...

... 天智十七年...

... 天智十七年...

(四〇)【身等】...

... 天智十七年...

(四一)【六龍の形】...

... 天智十七年...

第四卷

(四二)【本有の月】...

(一)【聖德太子】

... 天智十七年...

... 天智十七年...

(四三)【あすの日は】...

... 天智十七年...

(四四)【大阿彌陀】...

... 天智十七年...

(四五)【大寺の寺】...

... 天智十七年...

(四六)【小倉の山】...

... 天智十七年...

(四七)【】...

(三)【東大寺】... 天智十七年...

(四)【】... 天智十七年...

(五)【】... 天智十七年...

〇〇〇〇〇(Ⅱ、111)
 〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、112)
 〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、113)
 〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、114)
 〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、115)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、116)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、117)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、118)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、119)

ㄨ

〇〇〇〇〇(Ⅱ、114)
 〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、115)
 〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、116)
 〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、117)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、118)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、119)

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、114)
 (Ⅱ、115)

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、116)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、117)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、118)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、119)

ㄨ

〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、115)
 〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、116)
 〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、117)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、118)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、119)

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、114)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、115)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、116)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、117)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、118)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、119)

ㄨ

〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、115)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、116)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、117)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、118)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、119)

〇〇〇〇〇(Ⅱ、11)
 〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、12)
 〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、13)
 〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、14)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、15)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、16)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、17)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、18)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、19)

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、114)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、115)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、116)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、117)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、118)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、119)

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、114)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、115)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、116)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、117)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、118)
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇(Ⅱ、119)

漢語(一、四六)
 漢語(一、四七)
 漢語(一、四八)
 漢語(一、四九)
 漢語(一、五〇)

五

漢語(一、一〇X六、四六)
 漢語(一、一〇X七、四七)
 漢語(一、一〇X八、四八)
 漢語(一、一〇X九、四九)
 漢語(一、一〇X一〇、五〇)

漢語(一、一〇X一一、五一)
 漢語(一、一〇X一二、五二)
 漢語(一、一〇X一三、五三)
 漢語(一、一〇X一四、五四)
 漢語(一、一〇X一五、五五)
 漢語(一、一〇X一六、五六)
 漢語(一、一〇X一七、五七)
 漢語(一、一〇X一八、五八)
 漢語(一、一〇X一九、五九)
 漢語(一、一〇X二〇、六〇)

漢語(一、一〇)
 漢語(一、一一)
 漢語(一、一二)

六

漢語(一、一三)
 漢語(一、一四)
 漢語(一、一五)
 漢語(一、一六)
 漢語(一、一七)
 漢語(一、一八)
 漢語(一、一九)
 漢語(一、二〇)

七

漢語(一、二一)
 漢語(一、二二)
 漢語(一、二三)
 漢語(一、二四)
 漢語(一、二五)
 漢語(一、二六)
 漢語(一、二七)
 漢語(一、二八)
 漢語(一、二九)
 漢語(一、三〇)

漢語(一、三一)
 漢語(一、三二)
 漢語(一、三三)

八

漢語(一、三四)
 漢語(一、三五)
 漢語(一、三六)
 漢語(一、三七)
 漢語(一、三八)
 漢語(一、三九)
 漢語(一、四〇)

漢語(一、四一)
 漢語(一、四二)
 漢語(一、四三)
 漢語(一、四四)
 漢語(一、四五)
 漢語(一、四六)
 漢語(一、四七)
 漢語(一、四八)
 漢語(一、四九)
 漢語(一、五〇)

醫部全錄(卷一) 醫部全錄(卷二)
 醫部全錄(卷三) 醫部全錄(卷四)
 醫部全錄(卷五) 醫部全錄(卷六)
 醫部全錄(卷七) 醫部全錄(卷八)
 醫部全錄(卷九) 醫部全錄(卷十)
 醫部全錄(卷十一) 醫部全錄(卷十二)
 醫部全錄(卷十三) 醫部全錄(卷十四)
 醫部全錄(卷十五) 醫部全錄(卷十六)
 醫部全錄(卷十七) 醫部全錄(卷十八)
 醫部全錄(卷十九) 醫部全錄(卷二十)

醫部全錄(卷二十一) 醫部全錄(卷二十二)
 醫部全錄(卷二十三) 醫部全錄(卷二十四)
 醫部全錄(卷二十五) 醫部全錄(卷二十六)
 醫部全錄(卷二十七) 醫部全錄(卷二十八)
 醫部全錄(卷二十九) 醫部全錄(卷三十)
 醫部全錄(卷三十一) 醫部全錄(卷三十二)
 醫部全錄(卷三十三) 醫部全錄(卷三十四)
 醫部全錄(卷三十五) 醫部全錄(卷三十六)
 醫部全錄(卷三十七) 醫部全錄(卷三十八)
 醫部全錄(卷三十九) 醫部全錄(卷四十)

醫部全錄(卷四十一) 醫部全錄(卷四十二)
 醫部全錄(卷四十三) 醫部全錄(卷四十四)
 醫部全錄(卷四十五) 醫部全錄(卷四十六)
 醫部全錄(卷四十七) 醫部全錄(卷四十八)
 醫部全錄(卷四十九) 醫部全錄(卷五十)
 醫部全錄(卷五十一) 醫部全錄(卷五十二)
 醫部全錄(卷五十三) 醫部全錄(卷五十四)
 醫部全錄(卷五十五) 醫部全錄(卷五十六)
 醫部全錄(卷五十七) 醫部全錄(卷五十八)
 醫部全錄(卷五十九) 醫部全錄(卷六十)

醫部全錄(卷六十一) 醫部全錄(卷六十二)
 醫部全錄(卷六十三) 醫部全錄(卷六十四)
 醫部全錄(卷六十五) 醫部全錄(卷六十六)
 醫部全錄(卷六十七) 醫部全錄(卷六十八)
 醫部全錄(卷六十九) 醫部全錄(卷七十)
 醫部全錄(卷七十一) 醫部全錄(卷七十二)
 醫部全錄(卷七十三) 醫部全錄(卷七十四)
 醫部全錄(卷七十五) 醫部全錄(卷七十六)
 醫部全錄(卷七十七) 醫部全錄(卷七十八)
 醫部全錄(卷七十九) 醫部全錄(卷八十)

醫部全錄(卷八十一) 醫部全錄(卷八十二)
 醫部全錄(卷八十三) 醫部全錄(卷八十四)
 醫部全錄(卷八十五) 醫部全錄(卷八十六)
 醫部全錄(卷八十七) 醫部全錄(卷八十八)
 醫部全錄(卷八十九) 醫部全錄(卷九十)
 醫部全錄(卷九十一) 醫部全錄(卷九十二)
 醫部全錄(卷九十三) 醫部全錄(卷九十四)
 醫部全錄(卷九十五) 醫部全錄(卷九十六)
 醫部全錄(卷九十七) 醫部全錄(卷九十八)
 醫部全錄(卷九十九) 醫部全錄(卷一百)

醫部全錄(卷一百一) 醫部全錄(卷一百二)
 醫部全錄(卷一百三) 醫部全錄(卷一百四)
 醫部全錄(卷一百五) 醫部全錄(卷一百六)
 醫部全錄(卷一百七) 醫部全錄(卷一百八)
 醫部全錄(卷一百九) 醫部全錄(卷一百十)
 醫部全錄(卷一百十一) 醫部全錄(卷一百十二)
 醫部全錄(卷一百十三) 醫部全錄(卷一百十四)
 醫部全錄(卷一百十五) 醫部全錄(卷一百十六)
 醫部全錄(卷一百十七) 醫部全錄(卷一百十八)
 醫部全錄(卷一百十九) 醫部全錄(卷一百二十)

漢書(1, 100)
 漢書(1, 101)
 漢書(1, 102)
 漢書(1, 103)
 漢書(1, 104)
 漢書(1, 105)
 漢書(1, 106)
 漢書(1, 107)
 漢書(1, 108)
 漢書(1, 109)
 漢書(1, 110)

漢書(1, 101)
 漢書(1, 102)
 漢書(1, 103)
 漢書(1, 104)
 漢書(1, 105)
 漢書(1, 106)
 漢書(1, 107)
 漢書(1, 108)
 漢書(1, 109)
 漢書(1, 110)

漢書(1, 101)
 漢書(1, 102)
 漢書(1, 103)
 漢書(1, 104)
 漢書(1, 105)
 漢書(1, 106)
 漢書(1, 107)
 漢書(1, 108)
 漢書(1, 109)
 漢書(1, 110)

漢書(1, 101)
 漢書(1, 102)
 漢書(1, 103)
 漢書(1, 104)
 漢書(1, 105)
 漢書(1, 106)
 漢書(1, 107)
 漢書(1, 108)
 漢書(1, 109)
 漢書(1, 110)

漢書(1, 101)
 漢書(1, 102)
 漢書(1, 103)
 漢書(1, 104)
 漢書(1, 105)
 漢書(1, 106)
 漢書(1, 107)
 漢書(1, 108)
 漢書(1, 109)
 漢書(1, 110)

漢書(1, 101)
 漢書(1, 102)
 漢書(1, 103)
 漢書(1, 104)
 漢書(1, 105)
 漢書(1, 106)
 漢書(1, 107)
 漢書(1, 108)
 漢書(1, 109)
 漢書(1, 110)

圖書集成(一)

卷

圖書集成(一)

卷

圖書集成(一)

卷

圖書集成(一)

圖書集成(一)

圖書集成(一)

圖書集成(一)

圖書集成(一)

圖書集成(一)

卷

圖書集成(一)

圖書集成(一)

圖書集成(一)

圖書集成(一)

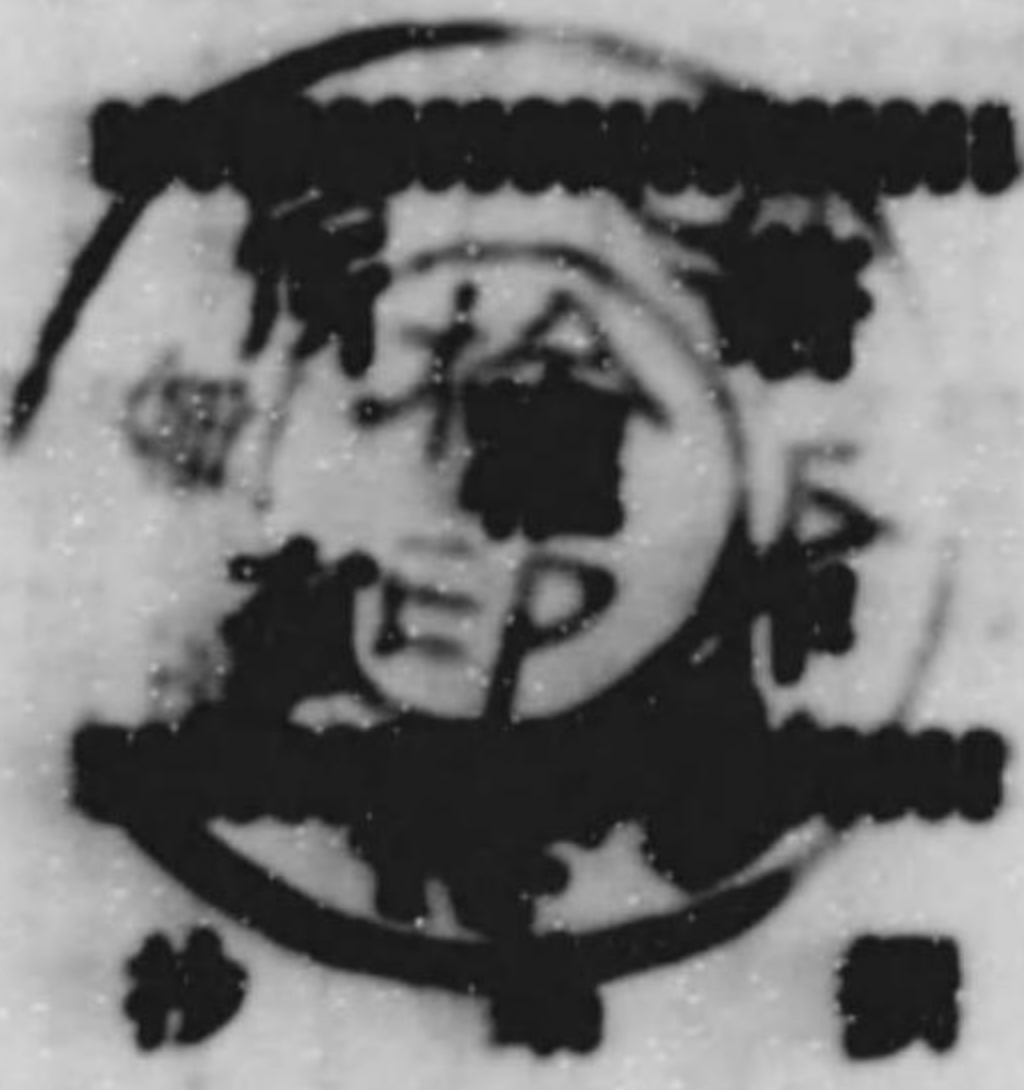
圖書集成(一)

圖書集成(一)

圖書集成(一)

圖書集成(一)

昭和二年十月三日印刷
昭和二年十月六日發行



總訂者
發行所
代表者
印刷者
印刷所

正價金壹圓

芳賀矢一

東京市神田區神保町九番地
會社 高山

行宮山町此島
坂本嘉治馬

東京市本區本町二丁目十二番地
寺井藤左工門

東京市本區本町二丁目十三番地
株式會社 芳賀會

圖書集成(一) (廿五册)

發行所

會社 高山

東京市本區本町二丁目十三番地

